

植民地宗主国にとって直接の利益をもたらさないためでもあったろう。しかし、そのせいばかりではなく、湿润熱帯では食糧の獲得は容易であって、自給的状态に満足している限り問題はないという、今日でさえも一般に流布している思い込みがあったからである。

戦後の食糧難と植民地の独立を経て、図式は変わった。これまで等閑視されていた自給生産部門に注意が向けられるようになった。その理由は、自給セクターが自給すらもできなくなるであろうという危機感と、自給セクターの所得の向上を目指さねばならないという独立国としての自覚とであろう。食糧の自給の確保と所得の向上を達成するために、企業的経営と集約的技術を核とする農業の近代化を基本戦略とするようになった。

主穀作物の集約化技術は、農業近代化路線の技術に外ならない。ほぼ一世紀前に温帯でみられた耕地拡大の終焉と同時に発達し、またそれを可能ならしめた技術である。先進国に農学を学ぶ留学生が学ぶものも、技術援助がもたらすものもそうである。反収の増大と技術の進歩はほぼ同意義と解される。

このように戦前、戦後を通じて、自給的農民による耕地の拡大を位置付けた農業観は、東南アジアに欠けていたと言える。そして、戦前から続く一種の楽観論と戦後の近代化一辺倒とによって、この現象は軽視され続けた。この軽視が主穀作物集約化への偏重を生み、現実の問題の解決に対する技術の対応を遅らせている。従来の東南アジア農業観への挑戦と言えよう。

〔19-5〕 本島合宿研究会から

福井 捷朗

以下に、議論の対象となった点、私が気の付いた点を述べます。必ずしも報告の要旨とは限りません。

〔1〕 稲の収量および収量構成要素

報告者：黒田

DDNL[18-2]の第1表で、81/83年の比較が示されている。収量についてはともかく、構成要素については、81 TP (N=33)と83 CS(N=174)とが比較可能であるだけである。したがって、81 CS(N=215)の収量(183.9g/sq.m)と83 CSのそれ(236.3g/sq.m)との差を、ここに示された構成要素の差をもって説明しようとすることは、いささか危険である。

図2で明らかなように、83年の面積当たり収量が81年より高かったのは、125 g/

sq.m以下の低収田がほとんどなく、81年のこれら低収田の収量が少なくとも中程度以上になったためである。200-225 g/sq.m以上の高収田の割合は、両年を通じてさほどの差はない。DDは、米生産の不安定性を特徴とするが、その不安定性のかかなりの部分がこのような形での収量変動によることが判明したと言える。意外な発見ではないとしても、この事実がデータで示されたことに意義がある。

〔2〕水田土壌と収量

報告者：松藤

DDNL[17-2]に報告されたクラスター分析の続き。米収量とクラスター及び粘土鉱物とクラスター。

土壌と米収量との見掛け上の関係は分かるにしても、それだけをもって真の関係としてよいのか。とくに水要因の重要性が自明のことである以上、それとの相対的比較が必要と思われる。水環境が大きく異なった81年と83年の比較がひとつの方法であろう。

配付資料あり。

〔3〕農作業暦（2526年）の解析

報告者：宮川

結果は全てプロット数で示されているが、これを面積に変えられないか？

移植期に関わらず出穂は品種群別で一定である。すなわち、感光性があり、その程度は品種群ごとにほぼ同じである。だとすると、移植期の早晩、すなわち、生育期間の長短と収量との関係が次の問題となろう。それが明らかになれば、降雨パターンの年変動による収量変動を知ることができよう。

83年に収穫が遅れたのは、出穂期が遅れたせいではなく、豊作のため収穫作業が遅れたためである。

黒田、松藤、宮川の報告を通じて考えねばならぬことは、以下の通り。

すなわち、収量と自然立地との関係を追及する際、両者を直接結びつけようとするのではなく、両者の中間項を考えるべきではなかろうか。その中間項とは、収量構成要素、品種、作季などである。換言すれば、作物の生理生態と収量との関連をまず提示することであり、それに基づいて環境との相互関係が追及されねばならない。

〔4〕水条件による水田評価及び区分について

報告者：河野

区分の目的と方法：終局的には、過去の降雨データからDDの稲生産の変動を再現するのに有効な区分を行なうことを目的とする。そのような区分をするにあたって、まず水稲品種の地理的分布に対応するような区分を行なおうとする。

1981年データによるクラスター分析には種々の問題点がある。e.g.筆数の制限、

データ変換、区分基準の不明確性、湛水パターンなど。

1983年NSB データを利用して湛水日数を指標とする区分を行ない、その結果を地形区分と対応させた。微地形による水文条件の差が地形区分では十分に捉えられていない。

湛水日数を指標とする区分は、当該年の実態をよく反映しているが、湛水パターンが考慮されていないこと、当該年以外の年に対する適用性などに問題がある。

NSB の一部を例として、81,83 年の湛水日数を指標とし、年毎の区分をして比較した。~~早稲~~ 年である81年に高位とされた水田の1/3 以上が、83年には中位、あるいは低位と区分された。

問題とされた点は以下の通り。

イ) 区分は何に合致すればよしとされうるのか。

ロ) 稲の生育、収量を決定するものは、湛水日数であるよりもストレス日数であるから、なんとか工夫してストレスの程度と期間を指標とする区分ができないものか。

配付資料あり。

〔5〕チー川中流域における水文量の変動特性と稲作生産

報告者：星川

4 県、24 年間の月間降雨量と県別稲生産データによる重回帰分析は、基本的には〔内田ら〕の結果と変わらなかった。

チー川の1962/63 年の洪水記録によると比流量が約 $10\text{cu.m/sec}/100\text{sq.km}$ を超えると洪水となる。

降雨データと洪水の発生との関係は、データの量が限られているせいもあるが、今のところよい結果はえられていない。

NSB での水収支の試算によると、流出は雨量のわずか2%にしか過ぎず、極めて高度な水利用効率を示唆している。

NSB の水田に於ける純貯水量の日変化と日降雨量との関係をみた。

生活用水の調査によると、1983年に手押しポンプ付の井戸の掘削ブームがあった。また、農業用ポンプの購入は3年前にピークがあった。

稲作労働の解析の手始めとしてそのプロセスを示すフローチャートを書いてみた。

配付資料あり。

〔6〕人口データの分析進捗状況

報告者：福井

DDNL〔18-5〕参照のこと。

〔7〕米倉調査から

報告者：舟橋

イ) 米倉を共用する世帯をもって基本的^計家系単位とすることができるか。

ロ) この調査は、農学班、経済班、社会班のいずれとも関連するが、具体的なデータの相互利用の目途が未だ立っていない。

DDNL〔18-6〕を参照のこと。

〔8〕村史

報告者：海田

筆単位の開田／開畑の年代とその後の経過は、水田については10数戸分、畑については159 筆の全部について調査できている。水田は 'Klum' と呼ばれる出身集落を同じくする人たちのグループによって、ノーングを単位として占拠されていった。2480 -2490 年代に第2の開田ブームがあった。これは税制の変化に連動している。畑地の開拓と所有権の確定は、商品作物の導入と土地制度の変化とによって促進された。農地所有権の移動理由としては、畑地では売買が相続を上回り、水田ではその逆である。そのほかに農地のインフラストラクチャー（排水路、池、堰、橋など）についても調査した。

DD村の成立期に、4-5の 'Klum' があって、それらがひとつの村を形成したことは、DDの特徴と思われる。近隣村中には、そのような例をみない。

近隣村に関して、それらの祖村、HND によって出ていった行く先に関する情報が欠けている。

東北タイ全体の概略史を知る必要がある。

配付資料：畑地全筆の所有者とその移動を示す一覧表

Event Calendarの一部改訂版

村史、開拓史に関する海田ノート

村史は、イ) 移住、開村のプロセス

ロ) 定着後の経過

のふたつに整理できるであろう。

年齢階層別に男女各26人のサンプルを抽出し、現在までに得た現金収入について、その年度、種類、場所、数量、期間、収入を調査した。

収入源としては、畑作物（ケナフ、キャサバ、棉など）、農地売買、園芸作物（とうがらし、パパイア、きゅうり、キャベツ、ジャックフルーツ、カリフラワー、たまねぎ、すいか、タバコ、からし菜、しょうが、チャンの木など）、養蚕、家畜売買、手仕事（大工、散髪、服屋、ござあみ、かご作り、とゆ作りなど）、精米所、漁業、仲買い、農業労働、賃金労働（定期、不定期）などがある。

これらのデータを使って、村経済全体のなかで各種収入源の絶対的、相対的比重がどう変化したのか、を分析できるか。

サンプル数が限られているので、個々の例を追及するより、村経済の全体を理解することを目的として分析を進めること。

配付資料あり。

1964,1981,1983年の各年の人口構成表

村民による村内有力者のランキングを81年と83年とで比較。村の指導者に望まれる資質。ランキング上位者の資質として村民が認めるもの。これらの調査結果を作表。リーダーの資質、とくに宗教的資質との関連を検討した。村長が高いランキングを占めるのは、その個人的資質よりも職ゆえである。モータムは、上位を占める。出家年数は必ずしもランキングと一致しない。

もっとも重要であるとされる儀礼のランキング。重要とされる宗教行為のランキング。息子の得度の意味。僧侶に望まれる資質。村人各人にとっての僧侶の意味。これらの調査結果の作表。両親を初めとする近親者の回向の意味をもつものが重要であると考えられている。

有力者ランキングの上位者の系譜上のつながり。特定の系譜集団（主として女系による）への集中が見られる。しかし、その集団が同一スームとして意識されているわけではない。

親族間結合に宗教（仏教とアニミズム）がいかなる意味をもっているのか。／村域を越えたスームがある。／DDのムラとしての意味の多角的検討が必要。

1983年追加分を含めた世帯主とその配偶者の一覧表の作成。

配付資料あり。

〔11〕クンプラタム信仰とモータムについて

報告者：林

タイ全国およびコンケン県における寺院数、僧侶数、見習い僧数／民衆仏教としての意味（擾災、招福の手段）／3種の儀礼体系（仏教儀礼、Khwān（「魂」）儀礼、精霊信仰（守護霊と悪霊））

DDの宗教／2つの寺院／Khwān 信仰（Mo Su(t) あるいは Mo Tham による「魂」の強化儀礼）／精霊信仰（専ら悪霊の観念が強く「善い Phi」の観念がない。これは Phi puta や Phi thiaowada を悪霊化し追放したためである）／モータムによるクンプラタム信仰の導入（モータムはモービーと異なり、男性に限られ、悪霊追放のための交信を行なうが呪力を用いず、その力の源泉は thamma であり、シャーマニスティックでない。）

現在、DDにはモータムが14名おり、その平均年齢は68.4才である。在家戒を日常的に順守するが、師匠の違いによって3つのグループがあり、禁食事項、悪霊処理法に差がある。

クンプラタムは、モータムとしての学習を修め、これを正しく Han Phratham（棚）に祈る者を介してメッセージを伝える聖なる存在である。仏陀と同じく守護者（phu raksa）である。プラタムの根本は在家戒にある。信奉者は、四斎日、ソクラン、入安居、結婚式後などにハンブラタムを訪問する。

Phi puta や Phi thiaowada の悪霊化と追放は、かなりDD特有の現象らしい。DDの成立が複数の Khlum の結合であることと関係しているのかも知れない。すなわち、時間の経過とともにクルム色が薄くなり、クルム守護神としての Phi thiaowada の意味が薄れ、スムの長であり同時にクルムを率いていた Mo thiaowada の権威が失墜したと思われる。いずれにせよ Phi puta や Phi thiaowada の追放の時期が土地制度の変革や、畑地の開墾とほぼ同じであることは、偶然の一致ではない（？）。

タイでも中央部ではモータムはない。モータムの役割を仏僧が兼ねている。東北部での僧の不足がモータムの背景となっているのか。

配付資料あり。

〔12〕近隣村の分類

報告者：前川

近隣32ヶ村の分類を以下の変数を用いて試みた。

コンケンまでの距離／幹線道路までの距離／標高／小河川までの距離／チー川ま

での距離／コンケンまでの時間距離／水田面積／畑地面積／菜園面積／1人当たり水田面積／ソントオ数

これらの変数の種々の組合わせを試みたが、あまりよい結果はえられなかった。

上の分類に用いた以外の項目として以下のようなものが調査されている。

村内工場（精米所、キャサバ処理場、動力源など）、作物別反収、栽培年数、電化の有無と年数、利用状況、肥料／農薬の使用量

近隣村調査の狙いはふたつある。一つは、近隣村に共通する特性の抽出であり、これをもって東北タイにおけるDDとその周辺地域の位置付けを考える。もう一つは、近隣村とDDとの比較であり、これを通して近隣村中でのDDの位置づけを考える。

配付資料あり。

〔13〕系譜／相続の事例別整理の状況

報告者：武邑

およそ50年前の水田所有者を基準点として系図を書き、系図に出現する人物についての情報をワープロを使って清書する。その項目は次の通り。

系図上の最初の祖先の来歴／農地の取得方法／農地の相続／その他の全ての雑多な情報／これらの情報に関する個人的コメント、疑問点などのすべて

村の有力者あるいは大きなスムの中心人物であるとされる人たちの系譜上の位置について、一部整理できた。それによると、大きなスムをもつと言われる得票順上位15人のうちの9人は、同じ先祖の血をひくか、もしくはその配偶者である。残りの6人のうちの3人は以上の血族の人々のいずれかと姻戚関係にある。全く無関係なのは僅かに3人のみである。重要人物ランキングの上位17人のうちの9人までが上述の血族、姻族と無関係である。

配付資料あり。

任意の系譜集団をとり、任意の個人数人がその集団に含まれる確率がいかほどなのかを試算してみること。

〔14〕生活時間調査の分析について

報告者：小池

5戸のサンプル農家に属する各個人が夫々ライフサイクルのある段階にあると考え、段階毎の特徴を捉えようとする。その段階とサンプル個人数は、以下の通り。

未婚男子	： 12名
成人男子	： 4名
主婦	： 4名
老人	： 2名

行かず後家： 2名

分析の手始めとして、1ヶ月平均の生活パターンを表示してみる。次いで以下の項目別に詳細な分析をする。すなはち、家事労働時間、経済活動の種類別労働時間、休息時間、行動空間、マスメディア接触時間など。

サンプル数が限られているので、少数のサンプルを平均して一般化するのは、危険である。むしろ、個人別のデータそのままを使って考察の方がよいのではないか。

配付資料あり。

〔15〕総合討論

氏名、固有名詞の英字綴りを統一すること。
個人名をどうするか。プライバシーの問題。

タイ側のDD研究に対する関心の高さなどを考えて、農村開発の問題にも相応の留意をすること。とくに DDNL [18-4] コンケン県ムアング郡開発計画（ブラサート訳）などに目を通しておくこと。

来年3月予定の中間報告の編集方針を確定すること。

世帯／個人番号の統一が望ましい。

社会／経済班が必要とする農学班からのデータの種類と整理の時期を明示すること。農学班のデータ処理の見通しはどうか。

次回の合宿研究会をいつ開くか。来年4月 ??

5年間の稲収穫状況（3段階分類）を示す図がある。米収量と降雨変動との関連の解析にあたってこれを活用すること。

水ストレスと稲収量との解析にあたって、時期の違いによるストレスの影響を Sink-Source の概念を用いて考えることも可能である。

農家経済の解析にあたって、農業生産や農外収入を細分して単純に加算するだけでなく、ライフスパンを考えた生涯所得解析のようなものができるものだろうか。

在村のまま通勤できる村が、東北タイ全体の中でどのぐらいの割合になっているのか。

（以上）